

平成 30 年度 南相馬市地域課題解決調査研究事業
「継続的な児童クラブ支援による子どもたちの自己肯定感の醸成」
報告書

新潟県立大学南相馬市子ども支援プログラム

1. プログラムの背景

新潟県立大学植木研究室は、南相馬市教育委員会との合意文書（2011 年 5 月）に基づいて、これまで約 100 回程度、新潟から南相馬市へ直接現地入りして、南相馬市子ども支援プログラムを継続してきた。

東日本大震災が発生した 8 年前から、新潟県内には、福島県南相馬市からの避難者や子どもが多く、なかには保護者の仕事の都合により帰郷する子どもたちも少なかった。このような背景から、私たちは南相馬市に戻ってゆく子どもたちへの支援活動が必要であると判断し、以来これまで子ども支援プログラムを実施してきた。とくに福祉的ニーズがあると判断される放課後児童クラブ（留守家庭児童）への支援が主な内容である。

2. プログラムの目的

新潟県立大学と南相馬市は、子ども支援に関する連携協定を締結し、これまで 7 年間にわたって市内の放課後児童クラブを対象に継続的な子ども支援活動を進めてきた。その結果、放課後児童クラブには、とくに福祉的な支援の必要な子どもたちが多く在籍していることから、自己肯定感の醸成が重要な課題であることがわかった。小高区においても「小高合同児童クラブ（小高小学校に併設）」が新設され、地元に戻ってきた子どもたちが適切な支援を受けながら自己肯定感を高めることが期待されている。



そこで、新潟県立大学子ども学科のスタッフによる子ども支援活動を実施し、放課後児童クラブへ継続的にかかわることで、南相馬の子どもたちが自己肯定感を育むことができるように支援することにした。

これらのプログラムを検証することにより、継続的な児童クラブ支援による子どもたちの自己肯定感を醸成することを目的とする。

3. 倫理的配慮

プログラム期間中は、みなみそうま復興大学フェイスブックのイベントページに写真を掲載するため、あらかじめ、南相馬市教育委員会事務局幼児教育課から各児童クラブをとおして、保護者の許可を得て掲載した。

4. これまでに実施したプログラムの概要

南相馬市教育委員会と子ども支援プログラムの展開で合意文書（2011 年 5 月 18 日付）を交わし、

遊びのプログラムなどで小学生たちとかかわることができるようになった。これにより南相馬市児童クラブの子どもと放課後児童支援員を対象に支援を継続することが可能になった。大学生スタッフが、南相馬市内の児童館・児童クラブへ分散して訪問することができ、子どもたちとの継続的な「またね」の約束をはたすことができた。

以上のような継続性が約束された子どもたちとのかかわりが、互いの信頼関係を育み、8年目以降の支援プログラムへの期待につながっている。

昨年度の支援プログラムにおいては、原町区、鹿島区のみならず、小学校を再開した小高区に対象を拡大しながら、継続的な支援を実施した。このようなプログラムの実施により、子どもたちのエンパワメント（潜在能力の顕在化）を高める効果が期待できるのではないかと考えている。そして、プログラムの目的をはたすために、新潟県立大学スタッフによる放課後児童クラブ放課後児童支援員への定期的なスーパービジョンのほか、大学生スタッフによる子ども支援プログラムを計画した。

5. プログラムの実施内容

平成30年度は、第1期（8月）と第2期（3月）にわたって事業を実施しました。第1期事業の実施をふまえて、継続事業となる第2期事業の効果測定を実施しました。詳細は以下のとおりである。

（第1期）

平成30年8月8日（木）～10日（土）

スタッフ26名

支援先（東町児童クラブ1・2、原町第一児童クラブ、橋本町児童クラブ、上町児童クラブ1・2、石神第一児童クラブ、石神第二児童クラブ、太田児童クラブ、大甕児童クラブ、鹿島児童クラブ1・2、上真野児童クラブ、八沢児童クラブ、小高合同児童クラブ）

（第2期）

平成31年3月11日（月）～13日（水）

スタッフ27名

支援先（東町児童クラブ1・2、原町第一児童クラブ、橋本町児童クラブ、上町児童クラブ1・2、原町第三児童クラブ、石神第一児童クラブ、石神第二児童クラブ、太田児童クラブ、大甕児童クラブ、鹿島児童クラブ1・2、上真野児童クラブ、八沢児童クラブ、小高合同児童クラブ）

（1）放課後児童クラブ支援



南相馬市の子どもの自己肯定感の醸成に寄与するために、既存の社会資源として現存する放課後

児童クラブを活用した。南相馬市内には、教育委員会が直轄する児童センター・放課後児童クラブが11か所あり、継続的な子ども支援による子どもたちの自己肯定感の醸成の有効性を検証するために、新潟県立大学による子ども支援を実施した。そのために、福祉系の教員と大学生で組織されるスタッフを派遣し、放課後児童クラブの職員である放課後児童支援員とともに子ども支援にあつた。

具体的には、児童福祉等を専門とする大学教員による放課後児童支援員への助言指導と、放課後児童クラブへの大学生の派遣による子ども支援事業を実施した。

(2) おやつ時間を設定した子ども支援



子どもたちとの信頼関係を深めるために、おやつ時間を設定した子ども支援を実施した。

その際、おやつパッケージを届けるだけではなく、「コープにいがた」組合員や子ども支援スタッフの協力を受けながら、「大型絵本の読み聞かせ（かわいそうなぞう）」および「食育教室」を実施することで、子どもとおとなが交流する機会をもつことができた。具体的には、新潟県立大学が、コープにいがたおよび南相馬市教育委員会と協同して、児童センター・放課後児童クラブを訪問して実施した。

南相馬市においてコープにいがたとの協同は、支援を要する子どもたちに安全・安心なおやつパッケージを届けてくれる団体として、被災地で高い信頼を得ている。今回はさらに、信頼関係にもとづく子どもとおとなの交流活動を意識して実施した。

6. プログラムの結果

今回の調査研究事業の実施により、継続的な子ども支援が、子どもとおとなの間の信頼関係を形成し、さらに信頼関係に基づく適切な子ども支援を実施することによって子どもたちの自己肯定感の醸成が可能であることがわかった。

新潟県立大学は、東日本大震災の被災地である南相馬市教育委員会と子ども支援に関する連携のもとに、これまでおよそ8年間にわたって継続的に支援にあたってきた。南相馬市内には、教育委員会が直轄する児童センター・放課後児童クラブが11か所あり、今後も継続的な子ども支援を行うことができる。しかし、本来は、南相馬市のおとなたちが、南相馬市の子どもたちに継続的にかわることが必要であり、そのためのしくみづくりが課題である。

今後は、新潟県立大学による子ども支援のみならず、南相馬市のおとなたちが、南相馬市の子どもたちに関わることが大切です。そのための体制づくりが急がれる。

一方で、年度末から上町児童センターでは、地域住民を対象にした子育て支援など本来の児童センター機能の一部が再開されている。南相馬市の児童センターは、地域のさまざまな人たちが集うことのできる地域の社会資源であり、地元のおとなたちが継続的に地域の子どもたちにかかわることができる。

このように、既存の社会資源（児童センター）を活用することによって、地域住民による子ども

支援活動を行うことが可能である。上町児童センターのみならず、東町児童センター、橋本町児童センターにおいても、本来の児童センター機能を再開することが求められる。

(植木信一：新潟県立大学人間生活学部子ども学科)